

社会人博士課程で博士（工学）の学位を取る

<プロローグ>

「社会人博士課程？ 博士を取るんですか？ また何で？」

この言葉を、同僚達から何度も聞かされた。

「大変な割には役にも立たないことだろう。メリットがあるなら教えてくれ。」

と目が語っている。

ここで、何か解りやすい理由を私が口にすれば、相手は簡単に引き下がるだろう。

もちろん私には、自分が納得するだけの明解な理由がある。しかし、それは個人の理由だから、興味本位の同僚に説明しても見当違い。

教えてやる義理も無いので、「さあ、(学位を) 取ってみれば解るんじゃないか？」とか、適当なことを言うておく。

「はあ、頑張ってくださいね。」

こんな不毛な会話が繰り返されているうちに、私にはひとつの疑問が芽生えてきた。

「どうして、どいつもこいつも、同じ反応をするんだ？」

<博士（工学）のイメージ>

私は電子機器メーカーの開発部門に勤務しており、周囲は工学系の大学・大学院を卒業したエンジニアばかりだ。どのエンジニアも、知り合いに一人や二人は博士（工学）の学位を持つ者がいるだろう。ところが、ほぼ全員が、博士（工学）の学位を持つことに意義を見出していない。無関心どころか、否定的な意見を持つものが大部分だ。

企業勤務のエンジニアは、理由は様々だろうけれど、人生のある時期に、大学での研究生生活よりも企業への就職を選択した人たちだ。つまり、大学での研究生生活を続けて博士（工学）の学位を取得することを否定した人の集団とも言えるのかもしれない。それならば、否定的なことも多少は理解できるが、否定したことを後悔している者は皆無であり、あまりに画一的な反応なので、まだ何かありそうだ。

結局、博士（工学）の学位に対する同僚たちのイメージは、「足の裏のご飯粒」。

「(学位は) 取っても喰えない。」

<統計から見た博士（工学）>

博士（工学）の取得者数は、毎年約3000人程度。

医師国家試験の合格者が毎年8000人程度なので、博士（工学）の学位を持つものは、医師よりも希少な存在と言える。

修士終了時に進学を選ぶ者の比率は、工学部では7%程度。工学部以外の自然科学系の学部では、大体20%であるから、工学部の博士課程は人気がないことがわかる。それゆえに、工学部の博士課程は常に定員割れ状態であり、博士過程に進学すること自体は比較的容易といえよう。

博士課程の3年間で学位の取れない者の比率(満期退学率)は、工学部では20%程度であり、他の自然科学系の学部と比較して、高くも低くも無い。ただし、満期で退学しても、3年以内に学位論文を提出して審査に通れば、学位は授与される。従って、博士課程に進学すれば、博士（工学）の学位はほぼ確実に手に入ると言える。

<ロールプレイング・ゲーム（その1）>

さて、今あなたが工学部の修士過程の2年生で、博士課程への進学か企業への就職かを決める時期にあるとしよう。

博士課程への進学を選んだとしたら、どのような未来が思い描ける？

◎ 博士課程を修了してから、民間企業に就職する？

修士卒で就職することに対して、何かメリットはあるのだろうか？

いや、修士卒のほうが、求人の選択肢が広く、活躍の場は多そう。

しかも日本の大学は、現実として産業界から乖離していて、多くの分野の工業技術は企業での研究・開発が中心となっている。

先端的で魅力的な仕事は、大学ではなく企業で行われている、といっても良いかもしれない。研究者にとっての「生きがい」は、大学の博士課程よりも企業の中にあるのかもしれない。

かくして、博士課程での専門と、企業に就職後の研究課題が同じという場合には、博士課程に進学するよりも、企業に就職することを選ぶほうが自然に思える。また、専門が異なるのであれば、博士課程在学時の経験は、直接的にはその後の企業での研究生活に役に立たないと言えるのではないかな？

いずれにしろ、博士課程修了後に企業に就職することは、不可能ではないが、直接的なメリットが見えにくく、最初からそれを前提として博士課程に進む意味はないと思う。

◎ 研究者として大学や研究機関に残り、教授の職を目指す？

これは狭くて険しい道。大学以外の研究機関を合わせても、ポストが限られる。

結局、博士課程修了からそのまま間を空けずに職を得られるのは少数派。

博士課程修了者を、3年間と限定した上で研究員として雇用するポスドク制度もある。

この制度も無いよりはマシだろうが、最高レベルの教育を受けた博士を、パートタイムか潜在的なフリータとしてしか遇することができないわけだ。

これでは、博士の学位を取ってもあまり明るい未来は見えてこない。

さらに、博士課程に進学すれば、無給どころか学費がかかる。

法律上は20歳で成人しているが、博士課程に進学すれば、修了する27歳までは、親の脛をかじることになる。

進学しなかった同級生たちは、バリバリ稼いでいると言うのに・・・。

結局、工学部では、多くの修士修了者は博士課程に進学しない。

いや、進学する理由が何も無い！

これでは、博士課程そのものを否定するイメージには、一部の隙も無いように見える。

<ロールプレイング・ゲーム（その2）>

あなたは今45歳で、大学院の修士修了後に企業に就職し、研究開発を20年やってきたとしよう。そこに「社会人博士課程」への就学の話が舞い込んできたら、どんな展開が考えられる？

◎ 社会人博士課程に籍を置くまで

大学側に、社会人博士課程の学生を受け入れる余力があることは既に述べた。

一方、企業側も社会人博士課程に人を送り出すことを奨励する場合がある。

目先の仕事に追われている直属の上司は、部下が大学の博士課程に首をつっこんで時間を使うことに難色を示すかもしれない。

しかし、企業全体から見れば、博士の学位取得は技術者として正当な自己啓発であり、補

助金を出すまでには至らなくとも、禁止はしない。

もちろん、社会人博士課程に進学する者も、送り出してくれる企業の都合を尊重することは大切だ。結局、周囲と自分の都合を調整する能力が必要なのだが、これは社会人にとっては常識の一部であり、今更強調するまでも無いことだろう。

◎ 研究内容について

企業で20年間の研究・開発の実績があれば、その結果を中心として論文をまとめることは、比較的容易だろう。

ここで注意すべきことは、企業の競争力に影響する様なノウハウに関することを、論文にどこまで書けるかを見極めることだ。この点だけは、博士課程への進学と企業の利益が相反する危険性がある。特許として権利関係が確定している内容や、製品化にまで至らなかった技術に関しては、論文に書いても問題が発生しにくいと言える。

さらに、企業での仕事をもとに論文をまとめるのであれば、大学の研究予算を大きく圧迫することは無い。これは、大学にとってのメリットとなるのかもしれない。

◎ 学費は給与から支払う

実績として、3年間で180万円ほどかかった。これは国産乗用車の新車1台分程度の額であり、決して少額とは言えない。

しかし、貯金をしてから入学するなど、収入に応じて合理的な計画を立てれば、家計を圧迫することなく学費を捻出できるだろう。

修士課程からそのまま博士課程に進学する場合には、親の脛をかじることになるが、社会人博士課程に進学する場合は、経済的にも自分の裁量でことを進めることができる。

◎ 企業経験のある博士のほうが、大学内に職を得やすい

企業から給与を得ていれば、生活の全てを大学からの収入でまかなう必要が無い。

そのため、客員・非常勤といった勤務形態からでも大学の教員としてのキャリアを始めることが可能だ。自分に適した条件の職にめぐり合うまで、企業側に生活の基盤としての軸足を置いておくことができる。

また、近年の工学部では、企業での実績が考慮され、助手・講師を経ること無くいきなり助教授・教授として招聘されることも多い。

<まとめと>

「博士（工学）の学位を取っても喰っていけない」

これは修士からそのまま博士課程に進学した場合には、かなりの確率で当てはまる。

博士（工学）の学位の価値が、不当に軽く見られている理由はここにある。

企業勤務の私の同僚たちが、学位に対して画一的な反応を示す原因とも言える。

日本の企業が大学の博士課程の価値を認めていないことも、背景にはあると思われる。

では、「喰うに困らない人が学位を取るのは？」

これには、上記と根本的に異なる展開がある。

「喰うに困らない人」とは、少し前ならば特権階級を意味したことだろう。

しかし、ここでは「企業から給与をもらって生活している人」といった、どこにでもいる人を指している。

実務的な問題は、全く無い、あるいは対処可能な範囲の問題しか無いと言える。

私は、新卒の博士に対する否定的なイメージを捨てて社会人博士課程に進学し、案の定、問題が無いことを自分で確認することになった。

その経験から言えるのだが、企業人は社会人博士課程をもっと身近に感じて、積極的に利

用することを勧める。

そして社会人博士課程を選択する企業人が増えれば、大学と企業との関係は今より良い方向に変わっていくだろう。

<最後に>

この文章では、博士（工学）の学位を取ることの意義については敢えて全く書かず、実務的な問題が無いことのみを述べている。

意義については、学位取得を志す人が、自分で納得するまで考えるのが当然と思う。

以上